

第6回館長講座 シチリア島での調査 アグリジェント近郊ローマ帝政期の別荘遺跡

2017年7月15日

1985年8月～11月に出かけたイタリアのシチリア島、アグリジェント近郊のローマ時代帝政期の別荘遺跡での発掘の様子と1997年に世界遺産に登録された「アグリジェントの遺跡地域」にある「神殿の谷」などを紹介する。

なぜシチリアへ

当時筑波大学講師だった青柳正規前文化庁長官はイタリア留学時代のポンペイの発掘に続き、シチリア島のローマ帝政期の別荘遺跡の調査を許可され、文部省の科学研究費により海外調査に着手した。この頃科研費による海外調査は1年おき、つまり2年に1回、3回まで、という原則があったので第1回は1979年、2回目は1981年、3回目が1983年、本来ここで科研費としては終わるはずだったが特例だったのかもう1回認められて4回目が1985年におこなわれた。私は2回目から参加するよう誘われていた。しかしこの誘いのあった時の身分は市原市教育委員会の職員、科研のメンバーにはなり得ずまた職場でも3ヶ月の出張させるような制度もなかった。3次調査の誘いのあったときはお茶の水女子大学に在籍していたので行ける、しかし専任講師でまだ大学内では見習いみたいなものだから、ということで行かない方がよい、というアドヴァイスがあり、断念。大学の教員といえども長期間公費で海外に出張するのは年に何人か、という時代で専任講師という立場でそういうことをするとやっかみを買うのでは、という心配をしてくれたようだった。85年には助教授となっていたので行けた。私にしてみると6年越しの希望が叶ったことになる。シチリアに渡る前、ローマにいるときにこの事故のことを知った。町がなんとなく騒がしく、街角で売っている新聞にもなにやら写真と *giappone* のことば。日本に電話をして概要を知った次第。

調査メンバー(肩書きは当時)

青柳正規(東京大学助教授・ローマ美術史)・鈴木昭夫(東京大学助手・文学部写真室)・渡辺貞幸(東京大学助手・考古学)・松本宣郎(東北大学助教授・ローマ史)・滋賀秀實(東京電機大学助手・建築史)・鷹野光行(お茶の水女子大学助教授・考古学)・石山勲(福岡市教育委員会)・前田昭代(考古学)・塚原孝一(南山大学学生・考古学)・松浦宥一郎(東京国立博物館・考古学)・浦上雅司(東京大学学生・美術史・イタリア留学中)、小川忠博さん ほか

このほか卒論を書き終えてしまったという聖心女子大学の4年生が二人、後半にやってきた。縄文土器の展開写真で有名な小川忠博さんは青柳さんの要請でローマのピラジュリア美術館にあるギリシア陶器の展開写真を撮るためにローマ滞在中で、美術館が休みになるとふらっとシチリアに現れ、小魚をたくさん買って開き、干物を作っていた。浦上さんは通訳として活躍してくれた。

Villa Romana di Realmonte o di Durruei の発掘調査

発掘開始前の、つまり 3 次調査終了後の遺跡の全景。すぐ北側(この写真の下側)に高い丘があり、そこからの眺め。屋根のかかっているところは遺構を保護するため、床にモザイクがあるところなど。

最近の状況を google マップから。海岸が海水浴場になっていることがわかるが、私たちの発掘調査中も大勢海水浴客が来ていた。

この遺跡では 1 次～3 次の調査を通じて、すでいくつかの部屋が掘り出され、床にモザイクの装飾のある部屋、壁に大理石が張られた部屋もあった。モザイクや壁の大理石はこれ以上損なわれることがないように、掘ったそばから修復されていく。壁の大理石は釘(?)などを使って止められ、モザイクは周辺を固定していく。これらの処置も、調査後公開することを前提に行われる処置であった。

第 4 次調査で発掘されたのは主として「西の浴場」と呼んだ W3～W9 の区画である。それまでに調査されていた V1～V6 は居住区画、N2～N8 は 3 回の改築が想定されている「東の浴場」、FT は第 4 段階(紀元 2 世紀末～4 世紀中頃)には貯水槽となっていた区画。私の担当したのは W7 室。

私の担当区 W7 の着手前

第 3 次調査で一部手がつけられていたのを引き継いだ。真ん中に壁体もしくは天井の落下したモノが倒れている。これを除去するのか、残したまま掘るのか、まず検討した。イタリア側の監督官は残して下にある土は除去しろ、レンガを重ねた束柱で支えるように、との見解。

エラクレア・ミノアの例

具体的にはこういう風に。でも、掘っている最中に土を取りながらレンガをはめていくなんて…。

結局とった処置は..

結局はかなり掘り進んだ段階で鉄製の支柱を 3 本、この壁体にかましておくこと。以前にこれこそ精神的支柱、と申し上げました。

W7 室の発掘経過

中はレンガや瓦が土に混じって大量に堆積していたが、散在していたものは取り除き何かを構築している様子のもをを残していった。

部屋の中央部に土の堆積遺跡状況を見るための土手を残した。床下の構造が次第に明らかになっていく。床下に空間がある床を支えるためのレンガで組んだアーチが見えてきたし、壁沿いには中空の四角い土管、中空レンガと呼んだり、そのままブッソワールタイル、

といたりしている、が連なっていることも見えてきた。

バスタブと浴室の床を支える束柱やアーチの構造。このアーチの上に四角いレンガが並べられ、その上に大理石が張られている。

床下暖房のある熱浴室で、床下を空洞にして暖気を送り、壁つたいにも中空タイルを通じて暖気が行き渡るようにした構造。

床下に暖気を送るかまども東壁に作られていたが、あとでふさがれたようだ。

発掘中、風呂場以外のものも

北側の壁沿いに人骨が見つかった。体は小さく、こどものようだった。鼻がとても高かった。根拠はなににもないが勝手に女の子と決めていた。あとでクリスチャンでもある松本さんがワインを手向けて埋葬し直した。でも、イタリアだからといってまだキリスト教は入っていないかも知れないのにキリスト教でやっついのだらうか、と冗談を言いながらでした。

廃墟となった家の壁沿いにこどもなどを埋葬することはよくあったそうで、あとでトルキニアでの別荘遺跡の調査でも何例かそういうことにあたった。

ところで例の「壁体は」

青柳さんは「発掘以前から地表に一部露呈していた壁体もしくは天井の崩壊したブロックは、周囲の発掘が進むことによって天井の頂部であることが分かった。なぜなら、その上面はオプス・シグニムムの平面仕上げであるのに対し、下面は湾曲面に漆喰装飾が施されているからである。平らな上面は、浴室が陸屋根であったことを示し、湾曲した壁面はヴォールト天井であることを意味する。但し、その湾曲した曲線から推定できる直径は浴室の幅 6.5m よりも短い。また、このヴォールト天井を装飾していた漆喰浮彫の断片も出土したが、その装飾パターンを復元するには至らなかった。」として復元図を作っている。

円い天井には漆喰で浮き彫りの装飾があり、壁沿いにはある高さまで中空レンガが這わされ、床下には空間があって暖気が入る。おそらくコンクリートで作られたバスタブにはお湯が入れられる。バスタブの上の洗い場に相当する床には大理石が張られていた。

ローマのお風呂

まずは脱衣場へ。浴場で働く奴隷に服を脱いで預け、まず温浴室(テピダリウム)と呼ばれるぬるめのサウナで体を温めた後、熱い湯に全身つかるために熱浴室(カルダリウム)へ。高温浴室には蒸気が充満しており、床下暖房が効いているため素足では歩けないほど熱い。人々は大理石のベンチに座ってたっぷり汗をかく。そして冷浴室(フリジダリウム)へ。ローマ人はこれら三つの浴室を交代で回りながら楽しんだ。

W5 冷浴室(モザイクと浴槽)

W4室の西隣に位置するW5室は5.82×13.30mの平面を有するこの別荘では最大の浴室である。浴室は、浴槽のある北側部分と前庭部分とからなる。前庭部分の床面は四種類の大石によるモザイクで装飾されているが、中央だけに遺り、周囲の大石は剥ぎ取られている。壁面下部の腰羽目部分も大理石で覆われ、腰羽目部分の上は彩色漆喰装飾であったことが多量の装飾用大理石断片（主に白大理石）と彩色漆喰断片の出土によって確認された。前庭部の南壁開口部から1.74m北側にある障壁は、W4室の目隠しと同室から暖気が逃げるのを防ぐためである。

浴槽はこの一段と高くなった北側の大部分を占め、円形の浴槽中心部と東西に張り出した矩形部分とからなる二つの張り出しのうち東のそれには浴槽への階段がある。浴槽は平均1.26mの深さを有しており、底面の最高部と最低部とでは10cmの高低差がある。明らかに排水を考慮した造作で、事実、この最も低くなった南西隅に排水口が認められる。浴槽の底は小型煉瓦を綾杉状に並べた簡潔な舗床が施されている。浴槽の周壁と階段は白大理石板で覆われ、底面と周壁の接点、階段の目地には防水用の目貼りが施されている。

W8 微温浴室（東柱の部屋）

冷浴室（W5室）と開口部を共有するW8室（3.52×4.6m）には、床下暖房設備が遺る。東柱は南北方向に6列並び、壁沿いの東柱だけ四角いレンガが使用され、内側の東柱には直径約20cmの円形レンガが用いられている（但し、北西寄りに例外が一箇所認められる）。各東柱の間隔はその中心軸間で61cmあり、東柱の上に置く大形レンガの大きさに対応している。東柱の高さは平均約60cmで、東柱の立つ床面は、東から西へ約10cmの高低差をもって傾斜している。

モザイクの修復

3 次調査で掘られた床面のモザイクの修復が同時におこなわれていた。その順序は、1 はずれそうなモザイク片（テッセラ）を外す 2 外したところの下地にセメントを置く 3 その上のテッセラを並べていく 4 上からセメントの粉末をかけ目地に入れていく 5 上から水をまき、セメントを固める 6 板を当てたたき、しめる。7 できあがりだが、8 でも、テッセラが余る???

アグリジェント Agrigento ギリシア名 アクラガス 神殿の谷 valley of temples

現在にアグリジェントの市街地の南に遺跡地域が広がり、そこには紀元前6世紀以来の神殿群が残る。

ジュノーネ・ラチニア神殿（ヘラ神殿）

ジュノーネ・ラチニア神殿は、神殿の谷の東端、最も高い標高120mの丘の頂点に建つドーリス式神殿。他の神殿群とは距離をおいたところに位置している。

紀元前 460 年～440 年頃に建造され、ギリシア神話の最高神ゼウスの正妻ヘラに捧げられたといわれている神殿。神殿の規模は、横 17m、縦 38m、高さ 15m で、柱の本数は横 6 本×縦 13 本。建造後、カルタゴ軍の進攻と中世に起きた地震で全壊し、現在は 25 本の柱がのこる。基壇に残る白い漆喰は、ギリシア時代に基壇や柱が白く塗られていたことを物語っている。

コンコルディア神殿

コンコルディア神殿は、丘の中央に位置し、ほぼ完全に近い姿を留めている。コンコルディアとは、ローマ神話の平和・調和・和解を象徴する女神のこと。付近から発見された石碑断片に由来してコンコルディア神殿と称されたが、この石碑との関係は解明されていない。

紀元前 450～440 年頃、ディオスクリ神に奉献されたものと推測されている。神殿の規模は横 19.7m、縦 42m、高さ 14m で、シチリアでは最も大きく美しいドーリス式神殿。ギリシャ・アテネのパルテノン神殿の約 2/3 の大きさを誇る。前面 6 本、側面 13 本の柱が現存しており保存状態が良いことで知られている。

6 世紀末の初期キリスト教時代に、聖ペテロ・パウロ教会として転用され、柱と柱の間を色鮮やかな漆喰壁で塞がれていた。それが、結果的に補強された状態となり、地震で崩壊することなく、保存状態良く保たれたといわれている。柱には白い漆喰が残り、かつては大理石の柱のように白かったのだろう。横にはライトアップ用のライトが目立たないようにいくつもおかれていた。

エルコレ神殿 (ヘラクレス神殿)

エルコレ神殿は、神殿の谷広場にあるバールを背にして、正面に見える 8 本の円柱で、アグリジェントのドーリス式神殿の中では、最も古い紀元前 520 年に建造されたもの。その後、地震で倒壊したが、20 世紀に柱部分のみが修復され、現在に至っている。

当時の神殿の規模は、横 25m、縦 67m、高さ 16m と縦長で、柱の本数は 6×15 本だったといわれている。その後地震で倒壊し放置されていた。地震倒壊後の瓦礫の山だったが、1924 年に英国人考古学者ハードキャッスル卿が、現在の 8 本の柱を復元した。ギリシア神話の英雄ヘラクレスに捧げられた神殿といわれている。ヘラクレスの名の通り、他の神殿よりも柱のエンタシス（円柱の中ほどにつけられた膨らみ）が、力強く強調されている。

ジオヴェ・オリンピコ神殿

ジオヴェ・オリンピコ神殿は、ギリシア神話の万能の神ゼウスに捧げるために建造されたギリシア建築最大級の神殿だが、建造中にカルタゴによって破壊され、いまは石材の瓦礫の山とかし、基階（1126×56.3m）のみが残る。ギリシア時代に建てられた神殿の中では、最も大きいものの一つだった。表面積が約 6300m²あり、小さめのスタジアムと同じぐらい

の広さだったそうだ。紀元前 480 年に神殿の建築が始まり、規模が大きすぎたため、建築に年数がかかり過ぎて、紀元前 406 年カルタゴ軍がアグリジェントに攻めて来た際、未完成のまま破壊されてしまった。

その遺跡に横たわっている 7.75m の巨大な人像型の柱テラモーネが、神殿を支える柱だったという程の巨大構想神殿の廃墟。現在遺跡に横たわっている、テラモーネはコピーで、オリジナルはアグリジェント州立考古学博物館に展示されている。

ディオスクリ神殿

ディオスクリ神殿は、紀元前 5 世紀末に建てられたものだが、カルタゴ軍に破壊され、ヘレニズム期に修復されたが、その後の地震によって倒壊し、現在は 4 本の円柱だけが残っている。

現在の神殿の規模は、横 16m、縦 34m で、柱の本数が 4 本のドーリス式。ディオスクリとは、「ゼウスの息子たち」という意味で、万能の神ゼウスとスパルタ王妃レーダーとの間に生れた双子の息子、カルトルとポルックスに捧げられた神殿といわれている。

ローマ時代の町 (ヘレニズム・ローマ地区)

紀元前 2 世紀から紀元後 4 世紀頃まで、ヘレニズム・ローマ時代のアグリジェントの町の一部が、発掘されて公開されている。元々、紀元前 6 世紀から紀元前 5 世紀のギリシア時代の都市計画でつくられた町の上にてきた町なので、碁盤の目状で整然としている。

ヘレニズム期の回廊式の列柱廊「ペリスタイル」を持つ家や、「アトリウム」(中央に雨水を受ける水盤のある中庭)を持つ家がある。壁には漆喰やフレスコ画の跡、床には幾何学模様のモザイクや具象モザイクの一部残っている住居もある。白い覆屋のあるところがそのようなモザイクなどの残るところ。

床のモザイクには動物の意匠、幾何学的な模様など。床には私たちの発掘したうちの W4 の浴槽の床と同じつくりの部屋もあった。

道路の下には暗渠の排水路も作られている。

こうした公開された遺跡には必ず「管理人」がいる。公務員で、私たちの遺跡に作業員としてきていた大学生(休学中とか)も将来の仕事の候補の一つに挙げていたほどである。

アグリジェント州立考古学博物館 (Museo Archeologico Regionale)

アグリジェント州立考古学博物館は、シチリア第 2 の規模の博物館で、アグリジェントをはじめ、近郊で発掘された陶器や考古学品が約 20 の部屋に展示されている。

博物館の敷地内には、紀元前 1 世紀のファラリードの祈禱堂と呼ばれる小神殿や、小円形劇場と呼ばれる紀元前 3 世紀の半円形の集会所の遺構が見られる。ここは古代の公共施設だったと推測されている。

博物館の最大の見どころは、中央展示室にあるジョーヴェ・オリンピコ神殿を飾ってい

た、高さ 7.75m の人像柱テラモーネ (Telamone) である。神殿の列柱の間、基階から列柱の半ばまで石積みされた上に柱として組み込まれ、アーキトレーブ (梁) を支えていた男性の形をした人像柱で、この一体だけが完全な形で残っていた。保存状態も良く、圧巻といえる。「神殿の谷」のジョーヴェ・オリンピコ神殿跡に横たわっているテラモーネは複製品である。

博物館には、神殿を飾っていた装飾品や壁画、日常使用されていた貴金属や装飾品、器など沢山の展示品がある。見学には 1 時間～2 時間はかかる。